

マクロ学会通信

2011年 7・8月合併号 (Vol. 23 No. 244)

お知らせ

■ 理事会のお知らせ

日 時: 2011年(平成23年)9月12日(月)
午前中
場 所: 拓殖大学 文京キャンパス
C館

■ シンポジウム 2011 の開催のお知らせ

日 時: 2011年(平成23年)9月12日(月)
13:00~17:30
場 所: 拓殖大学 文京キャンパス
C館 201号室

東日本大震災からの全日本的復興が復興財源確保のためにも急がれています。また、首都圏直下型地震や南海地震に関連するリスクマネジメントの必要性も再認識されております。さらに、日本と同様な地震国のパキスタンのインダス川では洪水が発生し、世界各地で異常気象が食糧生産にも影響しております。本シンポジウムでは防災・減災を中心として持続可能性の向上に貢献する研究活動の成果を発表し、国家的・世界的規模での持続可能性改善ビジョンを描くことを目指します。

基調講演 「震災列島 ～私たちにできること～」
作家 高嶋 哲夫 先生に決定いたしました。

講演

1. 東日本大震災における岩手県を事例とした
「参加型復興(開発)の手法と理念」
新田 義修(岩手県立大学 総合政策学部 講師)
2. 将来の環太平洋自然エネルギー経済圏の
可能な形態について
木下 幹夫 理事(地球環境問題研究家)
3. 大津波を考慮したまちづくりのありかた
亀田 泰武 理事(水の未来工房)
4. 写真説明: 浦安市の液状化被害、
旭市飯岡地区の津波被害とガレキ仮置き場、その他
谷本 光生(谷本事務所)
5. 第3次関東大震災のリスクシステム分析と
政策シミュレーション
安田 八十五(理事 関東学院大学経済学部教授・工学博士)

詳細は別紙添付のポスターを御覧下さい。

■ JAMES 合同研究会開催案内

(マクロエンジニアリング・プロジェクト、未利用資源、水資源)

下記の要領で合同研究会(マクロ・エンジニアリング・プロジェクト、未利用資源、水資源)を開催いたします。皆様の参加をお待ちいたします。

話 題: パキスタン土壌改善プロジェクト計画
話題提供者: 北見辰男(JAMES理事)
内 容: 現地事情調査報告

現在、本学会とパキスタン・マクロエンジニアリング学会(M ESPAK)は同国の塩類・アルカリ土壌の改善プロジェクトを検討中です。7月初めに、吉野理事長及び北見が、同国を訪問し、他関係者と面会、現地の事情調査を行いますのでその結果概要をご報告いたします。

日 時: 平成23年7月21日(木)17:30~19:00
場 所: 横浜ランドマークタワー25F、ビジネスサポート
フロア会議室(会議室番号は、25F受付フロアのモニター
に掲示します)

連 絡 先: 角田晋也 kakutas@jamstec.go.jp,
木本研一 astec@fa.mbn.or.jp,
北見辰男 kitamictc@kxd.biglobe.ne.jp

■ 合同研究会 (地球環境研究会と

文明システム研究会)のについてお知らせ

○ 日 時: 7月16日(土)15:00~19:00
(確保時間、実質は16:00~18:00)
場 所: JICA 地球ひろば
(渋谷区広尾4-2-24)
4階MR① プロジェクター確保
地球ひろばへの届け出議題:
地球環境問題の議論

○ 日 時: 8月20日(土)15:00~19:00
(確保時間、実質は16:00~18:00)
場 所: JICA 地球ひろば
(渋谷区広尾4-2-24)
4階MR②

※プロジェクター確保不可

(部屋を変えても、予約で満杯、確保不能)

地球ひろばへの届け出議題: 今のところなし

■循環型社会研究会の案内

日 時 : 2011 年 7 月 30 日 (土)
午前 10:30-12:30 (開場は、10:15)
場 所 : 関東学院大学
KGU 関内メディアセンター8 階
K803 会議室 (横浜市中区太田町 2-23)

連絡先 : 横浜メディア・ビジネスセンター (YMBC)
8 階 TEL 045-650-1131

交通アクセスは

<http://univ.kanto-gakuin.ac.jp/modules/media7/index.php?id=81> を参照されたい。

講 師 : 安田 八十五 (関東学院大学経済学部
教授・キリスト教と文化研究所研究員)
講演 題目 : 『神は存在するか? - 神の存在証明へ
の科学的アプローチの意義と課題 -』
主 催 : 関東学院大学キリスト教と
文化研究所「依存症とキリスト教」研究グループ
共 催 : 日本マクロエンジニアリング学会
循環型社会研究会

■JAMESプロジェクト TARF

(The Asia Rice Forum Japan、アジア稲文化フォーラム)

ご案内

TARFは7月16日(土)、17日(日)に5月23日田植えという
ことで敷いた水稻布マルチ使用米作り実験(4アール)を見
学に行きます。どのようになっているのか楽しみです。
今年5月から始まった十日町市による無料のバスの往復
便に便乗することができます。(松代と世田谷とは数十年
の市民交流があるため、鉄道では片道7千円台です。)
16日土曜日の朝世田谷(世田谷区民会館前)から松代
(まつだい)に行き、帰りは17日日曜日の午後早目に松代
を出て世田谷に戻るという行程です。宿泊は十日町市の
宿舎(松和荘)の予定です。宿泊費は1泊5千円前後です。
準備するもの: 田畑に入ることのできる衣類、下着は着
替え分が必要、寝巻類、洗面用具(バスタオルを含む)、
帽子、軍手(必要の方)、汚れて良い靴(せたがや棚田の
をご使用の場合は使用料数百円がかかります)、簡便な
雨具、防虫剤・用具(必要な方)、サングラス(必要な方)、
近隣に温泉があるので、ご希望の方はご利用下さい。(50
0円)

布マルチ見学参加ご希望の方はメールでお知らせ下さい。

連絡先 : 秋吉祐子: yaki035@nifty.com
携帯: 080-1358-9635
増子隆子: caa95040@pop06.odn.ne.jp
携帯: 090-2434-0573

5月23日に敷いてから1カ月経過 (7月2日) の稲生育状況



<会員の皆様>

本マクロ学会通信は、次号9月号 (Vol.23No.245) は、**2011年9月1日** 発行予定です。メールアドレスをお持ちで、事務局にメールアドレスを登録されていない会員の方は、是非事務局までお知らせください。(メールを使用されていない方には、これまで通り送付対応いたします。)

発行・編集 日本マクロエンジニアリング学会事務局
〒112-8585 東京都文京区小日向 3-4-14
拓殖大学海外事情研究所
吉野研究室内 (担当: 齊藤)
Tel/Fax 03-3947-2323
E-mail: fyoshino@ner.takushoku-u.ac.jp
URL : <http://www.soc.nii.ac.jp/james2/>
本通信の他への無断転載を禁じます。

マクロ学会だより

会員情報

2011 年 7 月 2 日の日本経済新聞夕刊に、当学会
会員の富山和子氏のインタビュー記事が掲載されまし
た。記事の紹介をいたします。次ページ御覧下さい。

怒りを忘れた日本人 富山 和子さんに聞く

「米のカレンダー」づくりに、東日本大震災が影を落としている

「水田はダム」「水と緑と土は同義語……。環境・自然問題で時代をリードしてきた論客で、「日本のレイチェル・カーソン」とも呼ばれる評論家の富山和子さん。「東日本大震災で、自宅の本棚の書籍が崩れてしまつて」と、東京・大手町の日経本社を訪ねてくれた。

実は今、富山さんのライフワーク「日本の米カレンダー」の2012年版づくりが佳境を迎えている。コメ自由化論や農業悪書論が台頭した1989年、富山さんが「水田は文化と環境を守る」と訴えて始めたキャンペーン。一流カメラマンが撮った山、川、田

「これからカレンダーの文章を書きま

書き方がものすごく難しい。

地震と津波と原発の三重苦と

もなれば、ヨーロッパならデ

モが起きているに違いない。

今回は、怒りを忘れた日本人

というメッセージ性が前面に

出るかもしれない」

縄文文化と多くの鉱山が残

る東北は、アテルイなど先住

民の歴史のロマンも重なって

研究したい土地でもあった。

また、今回被災地となった太

平洋側は「やませなど自然の



とみやま・かずこ 1933年群馬県生まれ。早稲田大学文学部卒業、講談社編集者を経て評論家に。立正大学名誉教授。日本福祉大学客員教授。主な著書に「水と緑と土」「日本の米」「水の文化史」「環境問題とは何か」など。また「川は生きている」「お米は生きている」「海は生きている」などの児童書にも力を注ぐ。

地を這い、俯瞰の目を

れも反響は大きかった。

「次のテーマは水道問題でした。東京都の水道料金値上げが発表され、きわめて単純な主婦感覚から首都圏の水がどう賄われているかを知るために、水源地やダムまで現地調査を重ねました。ところが水の研究は水質から林業・土木まで間口も奥行きも広く、とらえどころのない深遠な世界だと思い知らされました」

「ある日、水問題で権威のある水利科学研究所の理事長が訪ねてこられ、学術調査に加わってほしいと依頼されました。国による初の北海道の防風防霧林調査で、私に与えられたのは地元民の意識調査。これが、私が水の世界に引きずり込まれる端緒でした。ずっと地域に滞在して、

色々な人と付き合いつつ歴史や自然を学ぶということに、時間もエネルギーも惜しまずに打ち込みました」

日本中の山と川と平野をべったり歩いた

「以来、この種の国土調査は富山の仕事だということになって、次々に調査を依頼されたことは大きかった。最上川、木曾川、天竜川、白川(熊本)など色々な水系の治山事業調査に関わって、過疎の山村から遺跡発掘現場まで回

った。日本中の山と川と平野をこれだけべったり歩いたのは、私が一番だと思います」

「水の原点は森林」「森林が海の魚を養う」といった富山学は、地べたを這うような観察と、鳥の目で列島を俯瞰するダイナミズムの産物だ。

「昔、ドイツのヘルマン・シュライバーという歴史家の書いた『道の文化史』を勉強し、ローマ人の道路造りの歴史などを学んだ影響が大きかった。一つは日本の舟運、海運だけでなく、峠越えの道など日本の交通史を総合的に見るようになった結果、日本海側こそ交通の要衝だとわかり、それを『水の文化史』に書いた。以来、表日本、裏日本という言葉が消えました」

「もう一つは、日本が2度の大改造でできた国だという観点。最初は稲作開始から大和朝廷の成立、条里制で土地を区切り水田をつくった時代。第2は室町末期から江戸中期にかけての治水と新田開

発の時代です。石の道路やヒラミッド、万里の長城などと同様に日本人は水田という生産手段を通じて大地を刻み続けた。しかも線や点の事業でなく、大地にはりついた面の事業で、二千数百年後も継続している。それを書いたのが『日本の米』です」

大震災は自然との付き合い方を考える転機になるか。

「日本は地形が急峻で、雨は梅雨と秋の台風時に集中する。それに火山国だから岩石が脆く、しかも地の底が揺れている。この4条件が特徴です。日本人は不安定な大地の上で、自然の力と折り合って暮らしてきました。今のよう

にコンクリートのダムと堤防で洪水を一気に捨ててしまうような硬構造でなく、変化する自然に寄り添い柔構造でやってきた。いわば足腰のクッションをきかせて生きてきたわけですね。その先人の知恵を取り戻す時にきています」

硬より柔 山河とともに

時流に逆らう新しい常識の「種まき人生」は、編集者生活が原点

「大学時代から講談社の編集部で働いていました。『幼

年クラブ』などを経て、総合雑誌『日本』で特集記事の取

材・執筆を担当しましたが、

一般的なニュースでは新聞や

雑誌にかなわない。そこで、

帝銀事件、下山事件、白鳥事

件など冤罪裁判などの批判に

徹底的に打ち込みました。三

重県名張市で起きた毒ぶどう

酒事件を世に問ったのは私で

す」

「何か変だ」という臭いや、現場を大事にする事件記者気質が身についた。評論家として独立後も「住宅公園、これでよいのか」という論文を発表。『自動車と騒音なかれ』(日本自動車文明批判) (サイマル出版会)も出版し、いず

色々々と付き合いつつ歴史や自然を学ぶということに、時間もエネルギーも惜しまずに打ち込みました」

日本中の山と川と平野をべったり歩いた

「以来、この種の国土調査は富山の仕事だということになって、次々に調査を依頼されたことは大きかった。最上川、木曾川、天竜川、白川(熊本)など色々な水系の治山事業調査に関わって、過疎の山村から遺跡発掘現場まで回

った。日本中の山と川と平野をこれだけべったり歩いたのは、私が一番だと思います」

「水の原点は森林」「森林が海の魚を養う」といった富山学は、地べたを這うような観察と、鳥の目で列島を俯瞰するダイナミズムの産物だ。

「昔、ドイツのヘルマン・シュライバーという歴史家の書いた『道の文化史』を勉強し、ローマ人の道路造りの歴史などを学んだ影響が大きかった。一つは日本の舟運、海運だけでなく、峠越えの道など日本の交通史を総合的に見るようになった結果、日本海側こそ交通の要衝だとわかり、それを『水の文化史』に書いた。以来、表日本、裏日本という言葉が消えました」

「もう一つは、日本が2度の大改造でできた国だという観点。最初は稲作開始から大和朝廷の成立、条里制で土地を区切り水田をつくった時代。第2は室町末期から江戸中期にかけての治水と新田開

発の時代です。石の道路やヒラミッド、万里の長城などと同様に日本人は水田という生産手段を通じて大地を刻み続けた。しかも線や点の事業でなく、大地にはりついた面の事業で、二千数百年後も継続している。それを書いたのが『日本の米』です」

大震災は自然との付き合い方を考える転機になるか。

「日本は地形が急峻で、雨は梅雨と秋の台風時に集中する。それに火山国だから岩石が脆く、しかも地の底が揺れている。この4条件が特徴です。日本人は不安定な大地の上で、自然の力と折り合って暮らしてきました。今のよう

にコンクリートのダムと堤防で洪水を一気に捨ててしまうような硬構造でなく、変化する自然に寄り添い柔構造でやってきた。いわば足腰のクッションをきかせて生きてきたわけですね。その先人の知恵を取り戻す時にきています」

(編集委員 嶋沢裕志)